「オープン・エデュケーション」と知識の未来

土屋俊

大学評価・学位授与機構

2013 年 6 月 14 日
CAUA FORUM 2013：
「オープンエデュケーションの日本における可能性を考える」

6 月の Courera

1. 無料教科書
2. コースの他言語への翻訳
3. イェールの参加
4. 10 の州立システムとの連携
5. あわせて、WSJ, NYT, Forbes の他における特集記事

無料教科書: MOOC と OER

- 「教科書」価格問題は、桁は違うが北米の高等教育コスト問題のひとつ
- 大学教科書産業 (Pearson, McGrowhill, etc) は崩壊寸前でありつづけてきている
- 日本について考えるともっと大変。日本においては、大学教科書が一般雑誌・図書の生産流通構造に寄生し、後者が瀕死状態である
- さらに、教科書を典型的な「学習資源」であると考えると、MOOC(コース提供) と OER(Open Educaitonal Resources) との関係について見直しが必要になる (かもしれない)
  - OCW と MITx との関係とか
  - California の州立大学システムと MERLOT の位置づけとか

多言語化: MOOC と「グローバル化」

- MOOC プラットフォームは、(原理的に) 言語から「中立」 ⇒ したがって、何語でも基本的にアメリカの MOOC から発信できる ⇒ 英語帝国主義の批判はあたらない (事実だとしても)
- むしろ、(インターネットだからこそ) 本質的にボーダーレスの高等教育サービス提供が実現していることが重要 ⇒ これまでの「オープンユニバーシティ」は、「国」が提供するものだった (日本だと放送大学)
- 現在でも、高等教育サービスを輸出品とする国もある (UK, オーストラリア、もちろん、アメリカ) ⇒ その意味がなくなってしまう
- MIT がモンゴルの若者をリクルートするという頭脳循環におけるアメリカ中心主義グローバル化はあり得る

Yale: ブランディング

- MOOC にたいする一貫した「質」の疑問
- 自然に淘汰が行なわれると考えられないのか
  - 高等教育を受ける機会の平等と結果の不平等とのバランスが社会的に受容されてきている ⇒ 「入試」(Test, Selection) という表現が “Admissions” にたいして使われてきた
  - ブランドは既得権?
  - したがって、淘汰は生じにくい

州立高等教育システムとの連携: MOOC と従来型高等教育「業界」との関係

- 「履修証明」(Certificate) と「単位」
- 「単位」と「単位時間」、修得単位と**在学年限**による学位授与
- 現代の州立システムの位置づけ ⇒ 4 年制大学在学者の 80% を収容 ⇒ 予算事情との闘い
- MOOC の「中立性」 ⇒ なんのためにも使える
  - 在職学習
  - リメディアル教育
  - 「遠隔教育」(公立遠隔教育機関との関係)
  - (日本の)「放送大学」

日本とアメリカの比較 (ほぼ 2010)

	US	日本
学位授与機関	4,495	
4 年制高等教育機関	2,774	
2 年制高等教育機関	1,721	
高等教育機関在学者数	20.3M	3.05M
高等教育機関在学者対人口比	5.7%	
フルタイム学生数	14.6M	
総経費 (∗)	$289B	$40B(?)

米国の統計は NCES もの、日本の統計は文部科学省のもの

∗ 2002 年に関する 2009 年の報告

ということで、MOOC は新しい局面に移行している

- MOOC は作るものではなく、使うもの
- MOOC は (一定の条件のもとで) なんとか維持可能 ⇒ 多様な収益構造の可能性が見えてきている
  - Open Source 型 ⇒ 既存システムとの妥協、融合
  - Open Access 型 ⇒ 既存システムにとっても利便性
  - Fremium 型 (?) ⇒ 既存システムとの妥協、融合

以上が序論

本論のまとめ

1. MOOC とは何であったか。そして、何であり得るか。
2. 何かが「オープン」であることの意味
3. 知識のオープン化がもたらすもの
4. 研究の意味、学習の意味

何であり得るか

- **MOOC は作るものではなく、使うもの**
- MOOC は (一定の条件のもとで) なんとか維持可能 ⇒ 多様な収益構造の可能性
  - Open Source 型 ⇒ 提供されるコースを使って、個別の教育サービスを提供する (その提供者と契約を結ぶ)
  - Open Access 型 ⇒ コース提供者がみずから出費してコースを提供する (その資金源がどこであるかは MOOC 運営者側からは問題ではない)
  - Fremium 型 (?) ⇒ 「履修証明料」(コース提供に対する付加価値と考える)
  - (ブランディングとの関係でいえば、広告効果を考えてもよいかもしれない)

「オープン」であることの意味

- 難しいことをいう必要はなく、「無料」であること
  - ただし、ネットワーク、端末については自己負担
  - 「オープン」であることには**理念性はない**
- ただし、バラマキではない
  - インターネットにおけるさまざまな追跡可能性
  - Learning analytics
  - 「履修証明」のためには必要
  - ただし、特定の集団を構築する必要はない ⇒ 「入試」がなくなる (別の意味の"Open admission")
  - クラスはいらない ⇒ 「クラス内順位」「クラス内分布」という (標準化されていない) 不思議な相対化が不要になる

今、起きていることは知識のオープン化と言うべき

- 学術文献へのオープンアクセスの動向
  - Green OA/Gold OA
  - Funder mandates
  - GRC Action plan
  - 17 歳の少年のガン検査薬発見と NIH の PubMedCentral
- 研究データへのオープンアクセスの動向
  - Linked Open Data 技術
  - "Big Data"
  - Scientific integrity
- オープン・エデュケーションによる知識のオープン化
- 情報量に「圧倒」されることはない
  - もともとの処理能力は有限なので、限度以上は処理できない
  - さまざまな organize するサービスの登場

⇒ 体系的知識の不要性 ⇒ 階層的体系というのは、所詮、ネットワークの特殊な事例にすぎない。⇒ 「教える」ことがそもそも不可能?

知り得たことはすべて知り得る時代

知識がオープン化した時代は幸福な時代か?

- 「知らない」という言い訳はなくなる
- (経済的理由によって)「知ることができなかった」という言い訳はなくなる

⇒ 完全に平等な競争になり、むしろ人生は過酷になるかもしれない

- しかし、すべての人という観点からは全体として幸福なのかもしれない (「住みやすい」社会)
- 体系信仰の崩壊 ⇒ 知識の文脈依存性の増大
- 実際的知識の重要性

しかし、オープン化は「消費者」だけにとっていいことか?

- 生産者としての研究従事者
  - オープン化 ⇒ Esotericism の崩壊
  - Esotericism は、権威の源泉でもあり得た
  - 権威をもつという「名誉」「敬意」を求めて、(経済的な利得のためではなく) 研究するという理念は失なわれることになるかもしれない
- 研究者は権威、名誉以外に何がうれしいだろうか
- (高等) 教育従事者としての研究従事者
  - この等値性が崩壊する
- いったい本当にうれしいのだろうか。しかし、その方向にあきらかに動いているようにみえる。さて?